九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# Vスギル構文におけるスギルの統語的特性

東寺, 祐亮
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/1462083

出版情報：九州大学言語学論集. 34, pp.113-128, 2014. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン：
権利関係：

# V スギル構文におけるスギルの統語的特性

東寺祐亮
九州大学大学院
toji.yuske1986@kyudai.jp

キーワード：日本語、統語論、スギル

## 1. 問題提起

### 1.1. V スギル構文の解釈と問題提起

V スギルという形式は非常に生産性が高く、動詞だけではなく(1)のように何らかの過剰性を表す[1]。以下、(1)のような V スギルという形式を V スギル構文とよぶ[2]。

(1) a. 派手な帽子をかぶりすぎた。
b. 高価なプレゼントを選びすぎた。

たとえば、(1a)の場合、「帽子が派手すぎる」という解釈があり、この場合スギルが「帽子の派手さ」に対して過剰の意味を与えていることになる。また、(1b)の場合、「プレゼントが高価すぎる」という解釈があり、この場合スギルは「プレゼントの高価さ」に対して過剰の意味を与えていることになる。ここで注目したいのは、(1a)の解釈は、「帽子」の「見た目の派手さ」が過剰であるということであり、(1b)の解釈は、「プレゼント」の「値段の高価さ」が過剰であるということである。つまり、V スギルの解釈には、「どのような対象」の「どのような側面」についてのことなのかが必要であるということである。本稿で問

---

[1] スギルを用いた言語表現は、(i)や(ii)のような現れ方をする場合もある。
(i) 提出期限がすぎた。
(ii) 特急電車が目の前を通りすぎた。
(i)は時間の経過を表す解釈になり、(ii)は通り越すという解釈になる。これに対して、(1)のように、何らかの要素が過剰であるという解釈を与える V スギルという形式がある。本稿は特に、(1)の形式に焦点を当てる。

[2] 影山 (1993)では、「～すぎる」が統語的複合動詞であり、統語的に形成される複合動詞であることが指摘されている。

題にしたいのは、(1)のような V スギルという形式のスギルが、「どのような対象」の「どのような側面」についての過剰性を表すかということである。本稿では、「どのような対象」についてなのかを表すものを「対象」と呼び、その対象の「どのような側面」についてなのかを表すものをスケールと呼ぶ。たとえば、(1a)では、「帽子」が対象であり、「派手な」がスケールである。

(1)は、対象が名詞である場合のスケールが関わる例であるが、(2)のように、event が「対象」となりその event についてのスケールが関わる例もある。

(2) a. プレゼントを慎重に選びすぎた。
b. ケーキを雑に運びすぎた。

たとえば、(2a)であれば、スギルが「選び方」の「慎重さ」に対して過剰の意味を与えていることになる。(2b)では、スギルが「運び方」の「雑さ」に対して過剰の意味を与えていることになる。また、(3a)であれば、スギルが「書く量や回数」に対して過剰の意味を与え、(3b)では「歌う量や回数」に対して過剰の意味を与えていることになる。

(3) a. 字を書きすぎた。
b. カラオケで歌いすぎた。

形態的な観点から見ると、スギルが Merge する相手は動詞であるように見える[3]。それにもかかわらず、(1a)のように、「帽子が派手すぎる」という意味解釈が生じる。ということは、文の意味を構成的（compositional）に派生させるアプローチにとっては、どのようにして構成的に V スギル構文の意味解釈が決定されているのか、つまり、構成的な派生に「対象」と「スケール」がそれぞれどのように関わるのかという点が問題となる。また、スギルが過剰の意味を与える相手が「どのような対象」のどのスケールについてのことなのかが、(1),(2),(3)でそれぞれ異なっていることも問題である。本稿では、構成的な派生において「対象」とスケールがそれぞれどのように決定されると考えるべきなのかを論じる。

---

[3] Merge の定義については、Chomsky (1995)に基づいている。

(i) Merge operation takes a pair of syntactic objects ($SO_i$, $SO_j$) and replaces them by a new combined syntactic object $SO_{ij}$. [cf. Chomsky 1995: 226]

**1.2. V スギル構文の統語的研究の目的**

生成文法において、言語表現は Numeration のすべての要素に対して Merge を適用させることによってつくられる。それによって得られた構造表示から、文の「音」の側面の基盤となる表示（PF）と文の「意味」の側面の基盤となる表示（LF）とが派生する。Computational System においてつくられた構造表示から、PF と LF が派生するということは、文の「音」の側面にも「意味」の側面にも、構造に基づいて決定される部分があるということである。特に「意味」の側面に関して言うと、文の「意味」には、Lexicon において指定されている語の意味の集積という側面だけではなく、構造が構築されることによって生じる側面もあることになる。もちろん、これらの２つの側面だけでは、文の「意味」を捉えるには不十分である。語の意味とそれらの構造構築によって生じる意味に、話者の「知識」を加えることで得られる「意味」もある。つまり、「意味」には、Lexicon において指定されている意味と、構造構築によって得られる意味と、世界知識から加味される意味の３つの「意味」があると考えることになる。

このように考えると、言語の統語的側面を明らかにするには、「意味」の３つの側面のうち、構造に基づいて決定される「意味」を精査し、選り分け、そこから、実際にどのような操作でその「意味」を生み出す構造が作られているのかを検証する必要がある。そのため、解釈に多義性をもつ言語表現は、構造的に解釈が決まることが現れうる重要な現象であるといっていい。本稿では、その一つである V スギル構文の言語現象を「意味」の３つの側面を念頭に分析する。

たとえば、(4)と(1)を比べてほしい。

(4)　　かぶった帽子が派手すぎた。
(1)　a　派手な帽子をかぶりすぎた。

(4)は「派手すぎる」という解釈である。しかし、すでに観察したように(1a)も「派手さが過剰である」という解釈がある。形態的には、(4)は「派手」がスギルと merge しているようにみえるが、１.１節で指摘したように、(1a)では「かぶる」がスギルと merge しているようにみえる。それにもかかわらず、(1a)は(4)と同じ解釈が得られるということは、(1)の意味解釈は、ある意味 Lexicon において指定されている語の意味の集積によって得られうる(4)の意味解釈とは異なり、スギルの何らかの統語的特性によって生じている意味である可能性があるのである。

本稿では、文の意味に３つの側面があるという考えのもとに議論を展開する。V スギル構文において、どこまでが構造構築によって得られる意味かに注意し

つつ、この構文がどこまで構造に基づいて決定されるのかを明らかにし、その意味解釈を得るためには、スギルがどのような統語的特性を持つと考えるべきかを検討する[4]。V スギル構文のような「解釈にスケールが関わる言語表現」には、従来「スケール」に着目して分析がなされてきた。本稿では、それに対して、「対象」に着目することによってはじめて、「解釈にスケールが関わる言語表現」の統語的特性を捉えることができることを指摘する[5]。

２.１節で、スギルが、「早く」のような、いわゆるスケールを持つ語を統語的に選択するという分析を検討し、２.２節では、スケールを持つ語を統語的に選択する分析の問題点を提示する。３.１節では、「対象」がどのような分布を示しているかを指摘し、３.２節ではスケールに対して、「対象」を統語的に選択するという分析を提案し、３.３節では、統語的に決定される「対象」に対して、スケールはどのように決定されるのか考察する。

## 2. スケールを選択する分析

### 2.1. 由本 (2005)

(1),(2)で、スケールを表す語は、対象を表す語に対する修飾語となっている。もし、スギルがスケールを表す語を統語的に選択するとすれば、対象は特に選択せずとも、決定されることになるので、スギルがスケールを表す語を選択するという分析がありえるかもしれない。実際、由本 (2005)の５章において、そのような分析が提案されている。

由本 (2005) は、V スギル構文に対して、スギルが統語的に[+gradable] 素性を持つ語を選択すると考えた。つまり、由本 (2005)の分析というのは、スギルがスケールを選択する分析である。以下、[+gradable] 素性を持つ語に下線を引く。

(5) a. 彼は<u>早く</u>（[+gradable]素性）家を建て過ぎたと後悔した。(＝家を建てたのが早すぎた) [由本 2005: 242, (44a)]

---

[4] V スギル構文は解釈にスケールが関わる言語表現であるが、本稿で指摘する V スギル構文の統語的特性が他の「スケールが関わる言語表現」の統語的特性と関連している可能性は高い。事実、東寺 (2012)で指摘しているホドを用いた比較相関構文と V スギル構文は、どちらも解釈を得るために「対象」とスケールを決定する必要がある。「対象」の分布、統語的特性共に高い類似性がみられるが、４節で触れる程度に留め、ここでは詳述しない。

[5]石居 (2008)も、由本 (2005)を元に比較相関構文を分析し、二つの構文に類似性がみられることを指摘している。しかし、石居 (2008)の分析にも、２.２節で指摘する問題点と同様の問題点がある。

b. 彼は大きな（[+gradable]素性）家を建て過ぎたと後悔した。（＝建てた家が大きすぎた） [由本 2005: 242, (45b)]

スケールを選択する分析では、たとえば、(5a)であれば、スギルが統語的に「早く」を選択することで「家を建てたのが早すぎた」という意味解釈が生じるとしている。また、(5b)では、スギルが統語的に「大きな」を選択するとしている。

しかし、(6a)の「うるさい」や(6b)の「きれいな」とスギルを関連付けた解釈はできないと由本 (2005) は観察している。

(6) a. この公園ではうるさい子供が遊び過ぎる。(≠子供がうるさすぎる) [由本 2005: 230, (18c)]

b. この映画では、普通の通りをきれいな人が歩きすぎる。(≠人がきれいすぎる) [由本 2005: 230, (20c)]

たとえば、(6a)は「子供がうるさすぎる」という解釈ができないとしており、同様に、(6b)も「人がきれいすぎる」という解釈ができないとしている。これらの観察から、由本 (2005) は、(7)のように指摘している。

(7) すべての動詞において、主語の修飾語句には「過ぎる」の意味作用が及ばない。 [由本 2005: 243, (i)]

また、(8)から、[+gradable] 素性を持つ語が埋め込まれていると選択できないと観察している。

(8) a. 健は[$_{CP}$ [$_{IP}$ 子供がよく勉強する]と]言い過ぎた。(≠健は子供がよく勉強しすぎると言った)

b. 健は[$_{NP}$ [$_{CP}$ 花子が小さく書いた]字]を読み過ぎた。(≠健は花子が小さ過ぎる字を読んだ) [由本 2005: 259, (66a,b)]

たとえば、(8a)は「よく勉強しすぎる」という解釈ができないとしており、(8b)は「字が小さすぎる」という解釈ができないと述べている。

そして、由本 (2005) は、これらの観察から(9)のように分析している。なお、(10)と(11)は(9)で前提とされている概念である。

(9) 「過ぎる」は統語構造内において統率する要素の中から[+gradable] 素性を探し、それをターゲットとして選択する。[由本 2005: 264, (75)]

(10) 統率

$\alpha$ が $\beta$ を m 統御し、$\alpha$ と $\beta$ が同一の最大投射範疇内にあれば、$\alpha$ は $\beta$ を統率する。

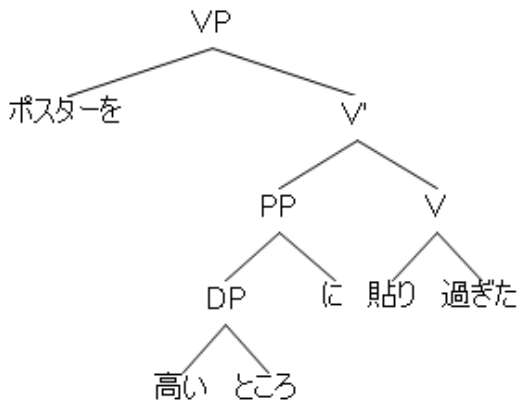
(11) m 統御

$\alpha$ が $\beta$ を支配せず、$\alpha$ を支配する最初の最大投射が $\beta$ を支配するとき、$\alpha$ は $\beta$ を m 統御する。

ただし、(12)の「高い」のように、直接スギルに統率されていない要素でも選択が可能な場合はある。

(12) ポスターを高いところに貼りすぎて、見えないよ。（＝貼ったところが高すぎる） [由本 2005: 261, (70a)]

(13) (12)の樹形図




「高い」の上に PP があり、スギルの最大投射が「高い」を支配できず、スギルは「高い」を統率できない。そこで、由本 (2005) は「[+gradable] 素性の浸透[6]」という概念を用いて、(14)の仮定を加えている。

(14) [+gradable]素性はそれを直接支配する DP とさらにその DP を直接支配する PP まで浸透する。 [由本 2005: 263-264]

(12)の「高い」の[+gradable] 素性は(14)でいうところの上の DP とさらに上の PP

---

[6]「[+gradable] 素性の浸透」という概念は Grimshaw (2000)にも見られる。本稿では、Grimshaw (2000)の「[+gradable] 素性の浸透」を参考にする。

まで浸透することになり、(12)は解釈できることになると述べている。

**2.2. スケールを選択する分析の問題点**

由本 (2005) の分析は、スギルに関わるスケールの範囲を構造的に規定しようとした分析であるといっていい。しかし、観察をさらに進めると、V スギル構文はもっと多様な解釈を持ち、V スギル構文のスケールの分布は、由本 (2005) で記述されているよりも、ずっと複雑である。

まず、スケールがスギルの統率範囲の外にあり、かつ、(14)が適用されない場合でも、比例関係を作る解釈が可能な場合がある。たとえば、(15)は、(6)と並行的な構造で、由本 (2005)ではガ格名詞句修飾部のスケールが過剰であるという解釈ができない例としている。しかし、(15)は文脈を設定すれば、十分に容認できる。

(15) （舞台で直前に踊った人があまりに綺麗だったので、次に踊る人は見劣りしてしまうかもしれない）
OK[綺麗な人が踊り]すぎた。

ガ格名詞句を修飾している「綺麗な」は、スギルに統率されておらず、由本 (2005) の分析では容認不可能と予測されるはずである。たとえ、「踊ったのが一回だけ、ごく短い時間で」という文脈であっても、(15)は十分に容認可能である。

また、(16)はスケールである「ややこしく」が複合名詞句内にある。

(16) （その論文はたった１パラグラフ読んだだけでもあまりにややこしく書かれていて理解することが出来なかったので、もっと簡単な論文を読むべきだった）
健は[[ややこしく書かれた]論文]を読みすぎた。

(16)は、「ややこしく」が複合名詞句内にあり、スギルによって統率されるとは考えられない。しかし、文脈を設定しておけば、(16)も十分容認可能である。このように、スギルに関わるスケールの分布を統率という統語的範囲で説明することはできない。

さらに、(17)も解釈可能である。

(17) 健は[[[派手に描かない] ポスター ]を作り]すぎた。

(17)の解釈は、「ポスターを派手に描かなかった」、つまり、「地味すぎる」と

いうことである。由本 (2005)の分析では、スケールを選択するとしたら「派手に」を選ぶことになる。しかし、それでは「派手すぎる」もしくは「派手すぎることはない」という解釈しか生じないので、(17)の解釈を説明することができない。

本節で述べてきたように、スギルに関わるスケールの分布を統語的に捉えることは非常に困難である。そこで、本稿では、スギルはむしろ「対象」を統語的に選択し、その「対象」を測るスケールは文脈的に設定されるという分析を提案したい。

## 3. 「対象」を選択する分析

### 3.1. 対象の分布

スギルが何らかの要素を統語的に選択することによって、目的とする解釈が得られるという由本 (2005)の分析は、スギルが統語的に解釈を決定しているという点で、支持できる。しかし、２節で示したように、[+gradable] 素性を持つ語をスギルが選択するという分析は不適切である。本稿では、そのかわりに、スギルが、何らかのスケールで度合いを測られる「対象」を選択するというアプローチを提案したい。

たとえば、(18)では、四角で囲んだ「対象」をスギルと関連付けた解釈が容認可能である。

(18) a. OK[きれいな人が踊り]すぎた。
b. OK 健は[難しい本を読み]すぎた。
c. OK 健は[カラフルなポスターを作り]すぎた。
d. OK 健は[[カラフルに描いた]ポスターを作り]すぎた。

(18a)は「人がきれい過ぎる」という解釈が可能である。このとき対象は「人」で、スケールは「きれいな」である。また、「踊る量が過剰である」という解釈も可能である。このとき「踊る」という event が対象であり、その event の量や頻度がスケールである。(18c)であれば、「ポスターがカラフルすぎる」という解釈が可能で、この場合、「ポスター」が対象であり、「カラフルな」がそのスケールである。また、「作る量が過剰である」という解釈もある。このとき「作る」という event が対象であり、その event の量や頻度がスケールである。(18d)でも同様で、「ポスター」が対象である場合の、「ポスターがカラフルすぎる」という解釈が可能である。このように(18)で印をつけた要素をスギルと関連づけた解釈が可能である。

一方、(19)では、四角で囲んだ「対象」をスギルと関連付ける解釈は容認不可能である。

(19) a. *[[[難しい本を説明した]論文]を読み]すぎた。
b. *[[[大きなポスターを描く]会社]を作り]すぎた。
c. *[[難しい本を読む]こと]を考え]すぎた。

たとえば、(19a)は「本が難しすぎる」という解釈が不可能である。つまり、「本」が対象で、「難しい」がスケールとなる解釈ができないのである。また、「説明しすぎる」という解釈も不可能である。この場合、「説明した」が対象で、その量や頻度がスケールとなる解釈ができない。同様に、(19b)でも、「ポスター」を対象とした「ポスターが大きすぎる」という解釈と、「描く」を対象とした「描きすぎる」という解釈は不可能である。また、(19c)でも、「本」と「読む」を対象とする解釈は不可能である。

(18)のように対象をスギルと関連付ける解釈が可能である場合と、(19)のように、それが不可能である場合があるということは、スギルが選択できる対象には何らかの条件があると考えるべきである。そこで、選択可能な(18)と選択不可能な(19)を比べると、選択不可能な場合、対象が複合名詞句内に含まれていることが分かる。一方、対象として選択可能な(18)では、複合名詞句の外にある。たとえば、(20)をみてほしい。

(20) a. OK その本を説明した論文を読みすぎた。
b. OK その本を説明した難しい論文を読みすぎた。
c. *[[[その本を説明した]論文]を読み]すぎた。
d. *[[[難しい本を説明した]論文]を読み]すぎた。
e. OK[[[難しい本を説明した]論文]を読み]すぎた。

(20a)では、「読む」という event を対象としておりその量が過剰であるという解釈、つまり、「読みすぎた」という解釈になる。また、(20b)では、「本」を対象として、「難しい」がスケールになる解釈、つまり、「本が難しすぎる」という解釈になる。ところが、(20c)をみると、「説明する」という event を対象としてその量が過剰である解釈、つまり、「その本を説明しすぎた論文」という解釈はできない。さらに、(20d)は「本」を対象として、「難しい」がスケールになる解釈、つまり、「本が難しすぎる」という解釈はできない。容認性の可否が複合名詞句の内か外かという構造的な要因で異なるということは、何らかの構造的な条件があると考えられる。

場合によっては、(20d)の場合に「論文が難しすぎる」という解釈は不可能ではない。これは、スケールの「難しい」は「難しい本を説明した論文は難しい」という推論からなりたっているものであると考えられる。ただし、この場合でも、(20e)のように、スギルが対象にするのは連体修飾節の外にある「論文」なので、「論文が難しすぎる」という解釈になる。

２節で指摘したように、スケールの分布は構造的に捕らえることは難しい。しかし、「対象」はというと、連体修飾節に含まれる要素は「対象」にならない。つまり、スギルは、連体修飾節に含まれる要素を「対象」にしないという統語的特徴を持つのである。

**3.2. 提案**

改めて「対象」の分布を見ると、たとえば(18a)では、スギルの「対象」になる要素は「人」と「踊る」である。また、(18b)でスギルの「対象」になる要素は「論文」と「読む」である。つまり、動詞とその動詞の参与者が「対象」となり得るのである。そこで、(21)のように提案する[7]。

(21)　　スギルは動詞か、その動詞の参与者の中の一つを「対象」にする。

そして、その「対象」が文脈的に設定されたスケールで測られる。

たとえば、(22)の tree では、「作る」と「ポスター」まで対象になり得る。また、(23)であれば、「会社」と「作る」までは対象になり得るが、それより深くにある要素を対象にすることはできない。

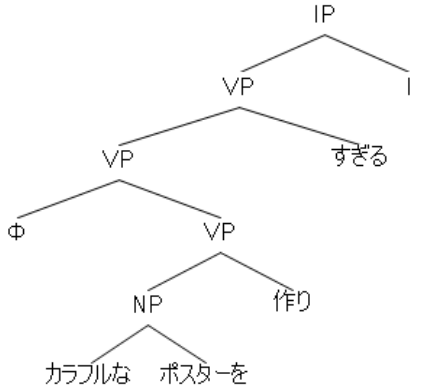
---

[7]本稿では、動詞に語彙的に指定されている項（語彙的項）の例を紹介しているが、項関係に基づいて「対象」を選択するとすれば、(i)のような例が問題になると思うかもしれない。

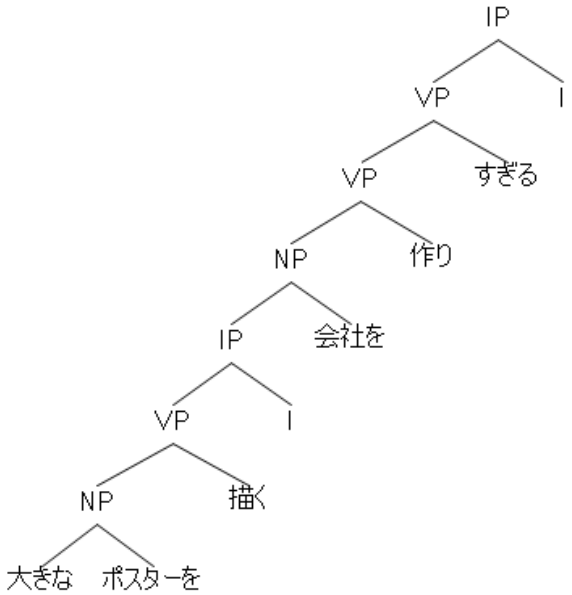
(i)　　大きな声で歌いすぎた。＝声が大きすぎた

しかし、高井 (2009)に従い、動詞が持つ語彙的項の指定とは別に、ある要素が動詞の構造と Merge することによって統語的に組み込まれる統語的項があると考える。語彙的項と統語的項が「対象」になりうる、つまり、参与者であれば「対象」になりうるということである。このように考えると、(i)の「声」は「歌う」の統語的項であり本発表の提案に沿うものである。同様のアプローチとして、Parsons (1990)の Event Semantics が挙げられる。当該の動詞の event に参与するものを並列的に扱う分析は、いわゆる項と付加詞の区別を行わないという点で、高井 (2009)の主張と同様のアプローチである。

(22) (18c)の樹形図




(23) (19b)の樹形図




**3.3.** スケールの設定

２節で示したように、統語的にスケールの分布の範囲を限定することは難しい。そのため、本稿では、何が対象を測るスケールとなるかは構成的（compositional）に決定されることではなく、文脈で設定されると考えるしかないという立場をとる。(24)の例文を見ると、(24)の「格好付けて」と「着飾って」はどちらも連体修飾節内にあるものの、(24a)が比較的容認されやすく、(24b)は容認されにくい。

(24) a. 健は[[[格好付けて描いた] ポスター ]を作り]すぎた。
b. 健は[[[着飾って描いた] ポスター ]を作り]すぎた。

構造的には、「格好付けて」も「着飾って」も「描いた」を修飾している。それでも、容認性に差が出るのは、(24a)の場合、「格好付けて描いたポスターは格好付けたポスターになる」という関係付けが可能なためで、「格好付けて」が「ポスター」に関するスケールであるという再解釈が可能になるのである。これに対して、着飾ってポスターを描いたとしても、ポスターが着飾っていることになるという解釈にはならない。そのため、「着飾って」は「ポスター」に関するスケールとは解釈できない。事実、(25)のように「格好付けて描いた」と「ポスター」の関係づけを阻む表現を使うと、「格好付けた」を問題にした解釈はできなくなる。

(25)　健は[[[格好付けて描いた] いつも通りのポスター ]を作り]すぎた。

このような複雑な現象を考えると、「ポスター」の度合いを測るスケールというのは、由本 (2005)で援用された「[+gradable] 素性の浸透」のような統語的な方法で解決しようとすることは難しい[8]。対象を測れると考えられるものを文脈から選んでいると考えなければ説明できない。

これまで説明したように、スケールは必ずしも構造的な修飾関係を持っている必要はなく、スケールの分布は統語的に捉えられるものではない。しかし、「対象」を測るスケールが設定されるためにはいくつかの制限が見られる。

まず、名詞が対象となる場合、スケールは文脈だけで何でもなることができるわけではなく、言語表現として現れていなければスケールになることができない。

(26)　（引っ越し業に就いているベテラン従業員の健は、若い者に負けじと大きな荷物を一人で運んだせいで、すっかり腰を痛めてしまった）

a.　健は荷物を運びすぎた。

b.　健は大きな荷物を運びすぎた。

たとえば、(26)のような文脈があったとしても、(26a)では、「荷物が大きすぎる」という解釈にはならない。一方で、(26b)のように、「大きな」という言語表現が現れていると、「荷物」を対象とした「荷物が大きすぎる」という解釈が可能になる。

---

[8] なお、ここで指摘している事実は、「[+gradable] 素性の浸透」を語用論的に援用したもので説明できるものではないと考えている。後に、注 9 で指摘する現象から考えても「[+gradable] 素性の浸透」に類似した分析で説明することは難しいと考えられる。

次に、event が対象となる場合、その event に関わると理解される修飾要素がなければ、その event の量や頻度がスケールとなる。

(27) a. 本を読みすぎた。
b. 水を使いすぎた。

たとえば、(27a)のように「読む」量／頻度が過剰であるという解釈や、(27b)のように「使う」量／頻度が過剰であるという解釈になる。ただし、すでに(2)で指摘したように、その event に関わると理解される修飾要素がある場合には、それがスケールとなる。

(2) a. プレゼントを慎重に選びすぎた。
b. ケーキを雑に運びすぎた。

たとえば、(2a)は「慎重すぎる」という解釈になる。

(26)、(27)でみられるスケールに関する制限は、それぞれ(28)、(29)のようにまとめることができる。

(28) スギルが「対象」として個物を選択した場合、スケールは言語表現としてあらわれているものに限られる。

(29) スギルが「対象」として event を選択した場合も、その event に関わると理解される修飾要素がある場合には、それがスケールとなるが、何も言語表現がない場合には、量もしくは頻度のスケールが設定される。

このように、スケールの分布は、２節で示したように統語的に捉えられるものではないが、ある程度の制限はあると考えられる[9]。

---

[9] スケールがどのように設定されているかということについて、匿名査読者から、興味深い指摘をいただいた。

(i) 健は [ [ [ 一瞬で 取材した] 記事を] 書き] すぎた（ので、上司に叱責された）。

(ii) 健は [ [ [ いい加減に 取材した] 記事を] 書き] すぎた（ので、上司に叱責された）。

(ii)は「いい加減に取材した記事はいい加減な記事になる」という解釈が可能である。一方、(i) は「一瞬で取材した記事は一瞬の記事になる」という解釈にならず、(ii)と同じ解釈ができうる。そのままの形で言語表現として現れていないものでも、「一瞬で取材した⇒いい加減な記事になる」のように、言語表現を引き金にして得られた推論の結果もスケールとして用い得る可能性がある。(26)の現象を鑑みると、どのような場合に

## 4. おわりに

表層的な構造と解釈における関係が直接対応しない構文においては、その解釈のどこまでが統語的に決まっているかを慎重に考察する必要がある。従来、「解釈にスケールが関わる言語表現」では、スケールに着目した分析が提案されてきた。しかし、本稿では、スケールの分布を構造的にとられることは難しく、一方「対象」の分布を構造的に捉えることは可能であることを示した。そして、統語的に選択されているものは「対象」のほうであり、スケールについては、文脈に基づいて設定されるだけであるという分析を提案した。

今後の課題として、「解釈にスケールが関わる言語表現」に共通した統語的性質がみられるかを検証したい。注２で指摘したように、本稿で指摘した V スギル構文と同様に、解釈を決定するために「対象」とスケールが必要な構文として、(30)のようなホドを用いた比較相関構文がある。

(30) a. ダンサーが踊るほど、舞台が華やかになる。 [東寺 2012: 20, (51a)]
b. きれいなダンサーが踊るほど、舞台が華やかになる。
[東寺 2012: 19, (48a)]

(30a)は、「踊る量／頻度と舞台が華やかになる度合いが比例する」という解釈になる。一方、(30b)では、「ダンサーの綺麗さの度合いと舞台が華やかになる度合いが比例する」という解釈も可能である。(30b)の解釈は、本稿で指摘したような、「ダンサー」を対象とし、「きれいな」をスケールとして設定した解釈である。分析を進め、日本語の「スケールが解釈に関わる言語表現」にどのような統語的性質が導けるか検証したい。

## 参照文献

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

Grimshaw, Jane (2000) Locality and Extended Projection. In: Peter Coopmans and Martin Everaert (eds.) Lexical Specification and Insertion, 113-133. Amsterdam: J.

---

スケールとなることができ、どのような場合になれないのかが問題となりうるが、それについては今後の課題としたい。

Benjamins.
石居康男 (2008)「日本語における比較相関構文について」金子義明他編『形式と意味のインターフェイス』248-258. 東京：開拓社.
影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京：ひつじ書房.
Parsons, Terence (1990) Events in the semantics of English: a study in subatomic semantics. London: MIT Press.
高井岩生 (2009) 『スコープ解釈の統語論と意味論』, 博士論文, 九州大学.
東寺祐亮 (2012) 「ホドの構造と解釈－比較相関構文におけるホドの項の選択－」 『九州大学言語学論集』33: 1-40.
由本陽子 (2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語―モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』東京：ひつじ書房.

# Syntactic Properties of the V-*Sugiru* Construction

Yusuke Toji
(Kyushu University)

This paper discusses the syntactic properties of the V-*sugiru* construction in Japanese, focusing on the fact that *Taro wa kookana purezento o kai-sugita*, for example, can mean not only that 'the amount of [Taro's buying an expensive present] was excessive', but also that 'the expensiveness of [the present Taro bought] was excessive'. The problem is how the second interpretation can be derived. While Yumoto (2005) proposes in effect that the interpretation in question is based on the syntactic relation formed between *sugiru* 'excessive' and *kokana* 'expensive', this paper argues that the syntactic relation crucial to this construction is established between *sugiru* 'excessive' and *purezento* 'present', and that the relation between *sugiru* 'excessive' and *kokana* 'expensive' is determined pragmatically.

(初稿受理日　2013 年 2 月 28 日　　最終稿受理日　2013 年 8 月 14 日)